

偽りの性的虐待の記憶をめぐって

高 橋 雅 延

Some Current Topics in the False 'Recovered Memories' of Childhood Sexual Abuse —

In recent years much has been written on the phenomenon of 'recovered memories' of childhood sexual abuse. Memory researchers repeatedly insist that most of them may be false or illusory memories of childhood sexual abuse among people who actually were not abused. There is no doubt that extensive use of techniques for recovering repressed memories in the psychotherapy can create false memories of childhood sexual abuse which never happened.

This article focuses on three topics studied in the false memory research. The first topic concerns the relationships between source monitoring confusions and false memory creations. Source monitoring refers to the set of processes involved in making attributions about the origins of memories, knowledge, and beliefs (Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993). Confusions between real and imagined events can be construed as source monitoring failure, which would create the false memory. The second is some problems inherent in such techniques used for recovering repressed memories as psychotherapy, hypnosis, and guided imagery. These techniques can help people create false memories. The third set of questions concerns how the memory for the negative emotional or traumatic events are remembered. Many studies of real-life events suggest that the negative or traumatic events are remembered quite well. These evidently contradict the view that a large percentage of clients are completely amnesic for actual childhood sexual abuse.

Finally, the article points out the following issues hitherto overlooked: how the various encoding strategies and collaborative remembering are involved in creating the false memory, and how the false 'recovered memories' may be cancelled. Further research is needed to resolve these issues.

1. はじめに——性的虐待と偽りの記憶

(1) 欧米での児童に対する性的虐待の現状

1960年代以降、欧米では、子どもに対する虐待、すなわち児童虐待 (child abuse) が、大きな社会問題となってきた (池田, 1987; 斎藤, 1992)。一般に、児童虐待とは、「親、または親に代わる保護者により、非偶発的に (単なる事故ではない、故意を含む)、児童に加えられた、身体的虐待、保護の怠慢ないし拒否、性的虐待、心理的虐待」を指す (池田, 1987)。なかでも、1980年代以降、児童に対する性的虐待 (child sexual abuse) の激増が、社会の関心を集めるようになってきた。また、これらの犠牲者の証言を集めた書物も多く出版されるようになった (たとえば, Barbara & Lohstöter, 1984; Bass & Thornston, 1983; McNaron & Morgan, 1982)。一般に、これらの性的虐待の被害者の大多数は、女性 (女兒) であり、かなり幼い頃 (5歳まで) に、父親や近親者の男性からの性的虐待を受けている。

ただし、実際に性的虐待がどの程度生じているのかという正確な数値そのものは、調査方法や調査対象者の違いから、調査ごとに、かなり大きなばらつき (たとえば、6%, 33%, 62%など) が見られている (Lindsay & Read, 1994)。さらにまた、Lindsay & Read (1994) も指摘しているように、大部分の調査が、大人を対象に児童期のことを想起させるという方法をとっているために、その正確さの点においても、問題があると思われる。したがって、児童に対する性的虐待の実状は、世間で思われているほど高い割合では起こっていないという可能性を完全に否定することができないのもまた事実である。

(2) 抑圧された性的虐待の記憶の回復

これに対して、実際には児童に対する性的虐待が、報告されているよりもはるかに多く起こっているにもかかわらず、それが表面化しないのは、その多くが Freud (1915) の言うように、「抑圧された記憶」(repressed memory) として、思い出せないためであるという考え方が現れてきた。このような考え方は、欧米の通俗書だけではなく、一部の心理学者の間にも、復活してきている(詳しくは、Bowers & Farvolden, 1996; Kihlstrom, 1997を参照)。すなわち、児童期の性的虐待のような情動的な出来事(emotional events)、すなわちトラウマ(trauma)となるような体験は、抑圧(repression)を受けることによって、本人の意識から忘却されてしまう。しかし、これらの「抑圧された記憶」は、大人になって意識されることはないものの、抑うつ(depression)や摂食障害(eating disorder)などのさまざまな精神的・身体的症状となって現れ、本人を悩ますというのである。

そこで、これらの症状に悩む人々の多くが、自分の症状の背後に、児童期の性的虐待の記憶が抑圧されていると信じ、心理療法師(therapist)のもとを訪れて、心理療法(psychotherapy)の助けを借りて、「抑圧された記憶」の回復(recovery)を試みるようになってきた。とりわけ、児童に対する性的虐待が、社会問題として大きく取り上げられるようになるにつれて、このような風潮は、いっそう強いものとなっているようである。

こうして心理療法(ないしは、さまざまな記憶回復法)によって、児童期の性的虐待の事実が「回復された記憶(recovered memory)」となってよみがえり、このことが原因で、家庭が崩壊してしまったり、子どもが親を訴えるというケースが激増してきた。たとえば、アメリカにおける典型的なケースでは、高学歴の白人の30歳代の女性が、最初、比較的軽い症状のために心理療法を受け、数ヵ月間の心理療法を受けた後に、15~30年前に父親から受けた性的虐待の記憶を取り戻して、父親を訴えたり、家族との絆を切ってしまうということが起こっている(Lindsay & Read, 1994)。また、イギリスにおいても、調査の結果、これとほぼ同様のケースが数多く認め

られることが明らかにされている (Gudjonsson, 1997; ただし, Andrews, 1997も参照)。

(3) 「回復された記憶」の真実性

このように、児童期の性的虐待の記憶の回復が一種のブームのようになると同時に、これらの「回復された記憶」の真実性が問題とされるようになってきた。たとえば、1993年、アメリカにおいて、カトリックの聖職者であるジョセフ・バーナディン枢機卿が、17年前に性的いたずらをされた記憶が催眠療法 (hypnotherapy) によってよみがえったという青年によって訴えられるという事件が起こった。この事件は、後に、「回復された記憶」が間違いであったことが明らかとなり、訴えは取り下げられたが、この事件は「回復された記憶」の真実性について考えるきっかけの一つとなった (ニューズウィーク日本版, 1994.4.6)。しかしながら、その後、今日に至るまで、「回復された記憶」が、実際には起こっていない幻の記憶 (illusory memory) ないしは偽りの記憶 (false memory) であるにもかかわらず、それがもとで、多数の家庭が崩壊し続けている。

実際、これら偽りの記憶によって、子どもから訴えられた家族の救済のために、アメリカでは、1992年に「偽りの記憶症候群協会 (False Memory Syndrome Foundation: FMS)」が、イギリスでは、翌1993年に「偽りの記憶英国協会 (British False Memory Society: BFMS)」が設立され、活発な活動を行っている。たとえば、アメリカのFMS協会の場合、1992年3月から1994年5月までのほぼ2年あまりの間に、「回復された記憶」で訴えられた親から約13000件もの相談が寄せられたという (FMS Foundation Newsletter, May, 1994 cited in Lindsay & Read, 1994)。

こうして、現在、児童に対する性的虐待そのものもさることながら、「回復された記憶」の真実性が問題とされるようになってきている。もちろん、Lindsay & Read (1994) の指摘するように、「回復された記憶」のすべてが偽りの記憶であるとは断言できない。しかし、これらの「回復さ

れた記憶」を何の疑いもなしに実在の出来事として信じてしまうことはきわめて危険なことである。児童に対する性的虐待そのものが悲劇であることは言うまでもないことであるが、偽りの記憶がもとで家庭が崩壊してしまうこともまた、別の意味で大きな悲劇であることを忘れてはならない。

(4) 偽りの記憶をめぐる論争

このような状況の中、多数の記憶心理学者たちによって、「回復された記憶」の多くが実際には起こっていない偽りの記憶であることが主張されるようになってきた（たとえば、Lindsay, 1994; Lindsay & Read, 1994; Loftus, 1993）。また、1996年7月にイタリアのアバノで開催された第2回国際記憶会議（International Conference on Memory）においても、偽りの記憶に関連したシンポジウムが行われ、Loftus, E. F.やLindsay, D. S.をはじめとした多数の記憶心理学者たちによって、きわめて活発な議論が交わされた。

そして、現在も、こうした偽りの記憶をめぐる、数多くの書物が発刊されているだけでなく（たとえば、Conway, 1997; Pezdek & Banks, 1996）、今後も発刊される予定が目白押しの状態となっている（たとえば、Appelbaum, Uyehara, & Elin, in press; Halperin, in press; Sandler, in press）。さらにまた、学術雑誌 *Journal of Memory and Language* においても、ゲスト編集者として、Nelson, D. L.とRoediger, H. L.が招かれ、「幻の記憶」に関する特集が、1996年発行の第35巻2号で組まれている。

このように、偽りの記憶をめぐる研究は、現在の記憶研究の中で、単なる現象や理論の探究といった次元を越えて、きわめてホットな位置を占めているのである。

2. 本論文の目的

(1) 日本での児童に対する性的虐待の現状と今後の展望

これに対して、日本においても、1990年代以降、先にあげた欧米の書物

が翻訳され出版されるようになると同時に、児童期に性的虐待を受けた女性の証言が公のものとなりはじめた（たとえば、穂積，1994；森田，1992；山口，1994）。こうして、日本においても、児童に対する性的虐待についての社会的な関心は次第に高まりつつある。たとえば、「性的虐待の加害者との血縁を示す氏名には耐えられない」との理由での氏名変更を認める決定が、ごく最近、大阪家裁で認められたこともその現れであると言えよう（朝日新聞，1997.4.30）。

ただし、日本での児童に対する性的虐待の実態については、未だ大規模な調査が行われていないため、正確な数値がわかっていない。たとえば、全国の児童相談所を対象にした児童虐待の調査（全国児童相談所長会，1989）においては、判明した虐待のうちの9%が性的虐待であった（ただし、ここは斎藤，1992より間接引用）。また、1992年に、島根県と福岡県下の大学を中心とした女子学生452名を対象とした調査において、比較的軽いものも含め、3.6%の者が、父親、兄弟、その他の親族から性的被害を受けたことがあるという結果が明らかにされている（石川，1995）。しかし、性的虐待が、アルコール依存の父親や父子家庭において多く生じるという指摘（池田，1987）から考えると、欧米ほどではなくとも、潜在的に日本でもかなりの数の児童に対する性的虐待が起こっている可能性がある（池田，1991も参照）。

幸いなことに、我が国において、心理療法によって性的虐待の記憶が回復されたというケースは、今のところ、きわめて少ないようである。そのためか、現在までのところ、性的虐待の犠牲者の証言（記憶）は、そのまま額面通りに受け入れられてしまっている。しかし、今後、ますます、このような証言が増える可能性を考えた場合、欧米で起こっているような「偽りの記憶」による悲劇が起こり得ないとは断言できない。そのような意味で、「偽りの記憶」に関する欧米の研究の現状について、記憶心理学者はもとより、臨床心理学者、心理療法家、カウンセラー、さらには、一般の人々に対して、広く知らせることが急務であると思われる。

(2) 本論文の目的と構成

そこで、本論文では、欧米における偽りの記憶研究の中で検討されているトピックスを取り上げ、研究の現状を概観することを目的とした。ただし、本論文は、偽りの記憶研究に関する包括的なレビューを目的としてはいない。偽りの記憶研究に関するレビューにとしては、すでに、優れた論文（たとえば、Lindsay & Read, 1994; Loftus, 1993）や書物（たとえば、Conway, 1997; Pezdek & Banks, 1996）があるので、興味のある読者は、そちらを参照してほしい。

さて、偽りの記憶研究で検討されているトピックスは、きわめて広い範囲の問題と密接に関連している。たとえば、自伝的記憶 (autobiographical memory) の問題（詳しくは、Conway, 1990; Rubin, 1996; Thompson, Skowronski, Larsen, & Bets, 1996を参照）、目撃証言 (eyewitness memory) の問題（詳しくは、Gudjonsson, 1992; Loftus, 1979; Ross, Read, & Toglia, 1994を参照）、子どもの記憶に関する問題（詳しくは、Ceci & Bruck, 1993; Kail, 1990を参照）は言うまでもないことであるが、これら以外に、心理療法に関連した問題、性的虐待という特殊な事態に関連した問題など、枚挙にいとまない。本論文において、これらすべてのトピックスを取り上げることは不可能であるので、今回は、第1に偽りの記憶を生み出す要因、第2に心理療法による記憶の回復の問題点、そして、第3に性的虐待のような情動的出来事の記憶の忘却（抑圧）、の3つを取り上げることにした。

3. 偽りの記憶を生み出す要因

(1) 記憶の構成的性質

記憶心理学において、記憶の変容ないしは歪み (distortion) が研究されたのは、それほど古いことではない（詳しくは、Roediger, 1996; Schacter, 1995を参照）。一般に、錯視などの知覚の歪みは、古く1850年代から問題とされてきたのに対して、記憶の歪みは1960年代以降に研究が行われるよう

になった分野である (Roediger, 1996)。その理由の一つは、Roediger (1996) の指摘するように、Ebbinghaus (1885) が記憶研究に持ち込んだ方法 (とりわけ無意味綴り) では、「想起できるかできないか」という「全か無か」という形式でしか想起を調べられないために (ただし、Bartlett, 1932 も参照)、記憶エラーや偽りの記憶について検討しにくかったことによると思われる (ただし、Schacter, 1995 も参照)。

しかし、その後の研究を通じて、現在の記憶研究者の間では、記憶は外界の出来事をそのまま記録するビデオ・テープのようなものではなく、出来事の断片が貯蔵され、想起の際には、その断片をもとにした再構成が行われるというように考えられている (たとえば、Kail, 1990; Loftus, 1979; Tulving, 1983)。また、神経科学からの知見においても、ある出来事の記憶が一カ所に集中して貯蔵されるのではなく、分散されて貯蔵された上で、再構成されることが明らかにされている (たとえば、Squire, 1987, 1992)。このように、記憶が構成的 (constructive) 性質をもっているという事実は、Schacter, Norman, & Koutstaal (1997) の指摘するように、記憶が正確であることの方が珍しいことを示しているだけではなく、誤った想起、すなわち偽りの記憶の出現が避けがたいことであることを示している。

このように記憶の歪みを生み出す要因は、記憶の符号化 (encoding) 段階、保持 (retention) 段階、検索 (retrieval) 段階のそれぞれの段階において、数多く存在している (詳しくは、Loftus, 1979; Roediger, 1996 を参照)。ここでは、これらの中でも、偽りの記憶の出現と関連の深い要因とされるソース・モニタリング (source monitoring) について取り上げることにする。

(2) 誤情報効果とソース・モニタリング

よく知られているように、記憶の歪みをもたらす要因の一つに、ある出来事を経験 (記憶) した後の事後情報 (post-event information) による干渉効果、すなわち誤情報効果 (misleading information effect) と呼ばれる現象がある (Loftus, 1979; Loftus, Miller, & Burns, 1978; Loftus & Palmer, 1974; 詳し

くは、巖島、1996を参照)。誤情報効果とは、ごく簡単に言ってしまうと、ある出来事を記憶した後で、その出来事と細部の一致しない誤情報を与えられることによって、もとの出来事の記憶が変容してしまうことを言う。このような現象の解釈として、研究の初期の頃は、もとの記憶が誤情報によって置き換えられてしまうというように考えられていた(たとえば、Loftus & Loftus, 1980)。しかし、現在では、ソース・モニタリングの混乱によって解釈されることの方が多くなってきている(巖島、1996; Schacter et al., 1997; ただし、Loftus, Feldman, & Dashiell, 1995も参照)。

ソース・モニタリングとは、記憶の起源(source)を同定する仮説的なプロセスのことであり、具体的には、ある記憶がいつ、どこで、どのようにして獲得されたのかということ判断するプロセスのことである(なお、Johnson & Raye, 1981も参照)。たとえば、ある記憶の起源が、本で読んだものであるのか、人から聞いたものであるのか、それとも実際に自分で体験したものであるのか、などを弁別するということである(詳しくは、Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993を参照)。このようなソース・モニタリングは、我々の日常経験からわかるように、時折、混乱してしまい、実際に体験して覚えている内容なのか、話を聞いて覚えている内容なのか、わからなくなってしまうことが起こる。

したがって、先に述べた誤情報効果について、ソース・モニタリングによる解釈では、自分が経験した出来事の記憶の起源と誤情報の記憶の起源が混乱してしまうことにより、どちらの記憶が実際に見聞した内容なのか、後から聞いた内容なのかの区別がつかなくなり、もとの出来事の記憶がどちらであったのかがわからなくなってしまう(正しく想起できなくなってしまう)というように考えられている。

(3) ソース・モニタリングの混乱と偽りの記憶

さて、偽りの記憶研究においては、このようなソース・モニタリングの混乱こそが、偽りの記憶を生み出す要因であるとして注目されている

(Lindsay & Read, 1994; Schacter et al., 1997)。すなわち、性的虐待について、書物やテレビで見聞したりイメージした内容の記憶と現実の記憶との区別ができなくなってしまう、実際には起こらなかった性的虐待に関する偽りの記憶が生み出されてしまうというのである。

実際、このようなソース・モニタリングの混乱が偽りの記憶を生み出すという解釈を裏づける実験的研究も数多く行われている (Ceci, Crotteau, Smith, & Loftus, 1994; Hyman, Husband, & Billings, 1995; Hyman & Pentland, 1996)。たとえば、Hyman & Pentland (1996) は、実際には起こっていない児童期の出来事の記憶が、面接を繰り返したり、面接中にその出来事のイメージを思い浮かべることによって、作り出されてしまうことを見いだししている。彼らは、まず、一人一人の被験者 (大学生) の親に対して、その被験者が6歳以下の児童期に実際に起こった出来事をいくつか尋ねておいた。そして、被験者に「幼い頃の思い出をどれだけ正確に思い出せるか」について調べる実験であると教示して、実際に起こった出来事に加えて、実際には起こっていない出来事 (「5歳の時に、ある結婚式の受付のパンチボウルをひっくり返して、中身を花嫁の両親にかけてしまった」) を呈示して、これらの出来事についての詳しい想起を求める面接を (日をおいて) 3回にわたって行った。

その結果、図1に示したように、面接の回数が多くなるにつれて、偽りの出来事の記憶を想起した人数の比率の増えることが明らかになった。さらにまた、実際には起こっていない出来事のイメージを思い浮かべるように教示したイメージ条件の方が、何も教示していない統制条件の被験者よりも、偽りの記憶を想起した人数の比率の高くなることを見いだされた。これは、ある出来事のイメージを思い浮かべることで、そのイメージ内容の記憶と実際の出来事の記憶との区別がつかなくなったこと (つまり、ソース・モニタリングの混乱) によって解釈されている。

さらにまた、神経科学の分野において、ソース・モニタリングと前頭葉 (frontal lobe) との関連性が研究されるようになり、上で述べた実験的研究

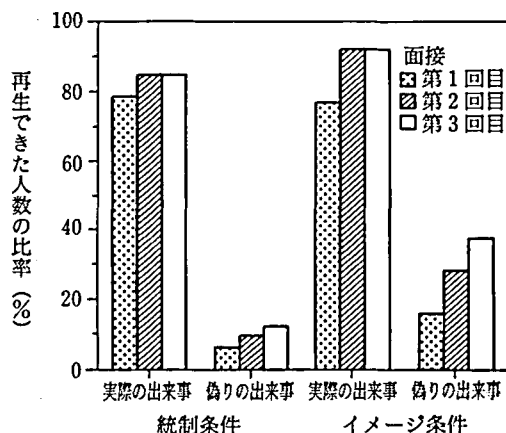


図1 3回の面接において実際の出来事と偽りの出来事を想起した人数の比率 (Hyman & Pentland, 1996)

と類似の結果が認められている。たとえば、前頭葉を損傷した患者は、ソース・モニタリングがうまくいかないだけではなく、実際に、偽りの記憶が生み出されてしまうことが明らかにされてきている（詳しくは、Moscovitch, 1995; Schacter et al., 1997を参照）。

このように、偽りの記憶を生み出す要因としては、ソース・モニタリングの混乱が指摘されることが多く、現在も、ソース・モニタリングと偽りの記憶との関係についての研究が活発に行われている。

4. 心理療法による記憶の回復の問題点

(1) 心理療法とさまざまな記憶の回復法

一般に、「抑圧された記憶」を回復するために、多くの者が、心理療法を受けている。たとえば、イギリスのBFMS会員に対する調査では、「回復された記憶」によって親を訴えた子どものうち、記憶を取り戻すために心理療法を受けていた者が47%にのぼっている (Gudjonsson, 1997)。一般に、

心理療法においては、治療のため、客観的事実よりもクライアントの心的事実の方を重視する。たとえば、高名な心理療法家である河合（1992）は、この点について、「心理療法家は、『唯一の正しい現実』が存在すると思えるよりは、現実を人間がどう認知するか、そして、そのような認知の仕方は、その人にとってどのような意味をもち、周囲の人々とどのように関係するか、ということに関心を払うということになる」（p.35）と述べている。しかし、そもそも、このような心理療法家の姿勢が、すでに偽りの記憶を生み出す土壌をつちかっていることは心にとめておかなければならないことであろう。クライアントの症状が解消されるのなら、偽りの記憶が生み出されてもよいなど考えることは、倫理上、許されることではないのである。

さて、欧米における心理療法では、「抑圧された記憶」を回復させるために、催眠（hypnosis）、誘導イメージ（guided imagery）、夢解釈（dream interpretation）などをはじめとして、実に多くの方法が使われている（Lindsay, 1994; Lindsay & Read, 1994）。たとえば、欧米の心理療法家に対して行われた調査では、記憶の回復のために、全体の3分の1の者が催眠や誘導イメージ法を使用することがあるという（Poole, Lindsay, Memon, & Bull, 1995）。

ここでは、心理療法において記憶を回復するために用いられる方法が、偽りの記憶を作り出してしまふ危険性について明らかにするために、これらの方法に共通した問題点を2つ取り上げることにする（催眠に特有の問題は、Lynn & Nash, 1994; Spiegel, 1995を参照）。すなわち、心理療法場面で使われる記憶の回復方法では、第1に自分の心に思い浮かんだものであれば、たとえどんな些細な思いつきやイメージであろうとそれらを重要視すること、第2に心理療法は一回限りで終わらずに、長期間継続して何度も行われるということ、の2点である。

(2) 思いつきやイメージを重要視することの問題点

心理療法において使われる「抑圧された記憶」の回復法では、自分の心に思い浮かんだ観念(思いつき)やイメージを、あり得ないことだと否定しない(実際に起こった出来事と関連があると判断する)。すなわち、ふだんであれば、そのような思いつきや漠然としたイメージが実際に起こったことと関連があるなどとは判断しないにもかかわらず、心理療法においては、思いつきやイメージと実際に起こった出来事との区別にこだわらない(すなわちソース・モニタリングの基準を緩くする)ように促されるのである。このことは、ソース・モニタリングの混乱を促し、思いつきやイメージを実際に起こった出来事であると誤って判断してしまう危険性をもたらしてしまうと思われる。

しかも、やっかいなことに、通常、回復しようとする記憶は、かなり昔のものであり、しかも、本人は「抑圧されている」と信じているために、最初から鮮明な記憶は期待されずに、ごく断片的なイメージさえも、それが実際に起こった出来事として受け入れられやすい状態になってしまっている。このように、記憶の回復を試みる本人の方でも、すでにソース・モニタリングの基準がきわめて緩くなっているのである。

このようなことは、心理療法だけに限らず、自分一人で行う記憶回復法について解説した通俗書においても、同様である。たとえば、欧米でベストセラーとなり、記憶の回復法が詳しく書かれているという通俗書『治癒への勇氣—児童期の性的虐待の女性犠牲者のためのガイド (The courage to heal: A guide for women survivors of child sexual abuse)』の中には、「たとえ、あなたの記憶が完全なものではなく、しかも家族が何もなかったと言っても、自分自身を信じるのが重要なのです。」という表現さえ含まれている (Bass & Davis, 1988, p. 87 cited in Lindsay & Read, 1994)。このような表現を読んだ読者は、漠然としたイメージが思い出されただけであっても、暗黙のうちに、それを確固とした記憶として受け入れてしまうのである。

したがって、心理療法で使われる記憶回復法だけに限らず、記憶を回復させようとする多くの方法は、ソース・モニタリングの混乱を生じさせ、偽りの記憶を生み出しやすい状態を作り上げていると言える（なお、Lindsay, 1994; Lindsay & Read, 1994も参照）。

（３）長時間継続して何度も行われることの問題点

先に述べたように、通常、心理療法における記憶の回復作業は、一回で終わらずに、継続的に時間をかけて何度も行われる。ここでの問題は、記憶の回復作業をこのように時間をかけて反復することによって、正確な記憶の回復が可能かどうかということにある。

古くから、学習心理学では、レミニッセンス (reminiscence) という現象が知られていた。これは、学習（記憶）直後に再生できない項目であっても、しばらく時間をおくと、それが再生できるようになるという現象である。最近では、再生テストを繰り返したり、テストに長い時間をかけることによって、再生量が増えるという現象は、記憶増進 (hypermnnesia) と呼ばれ、実験室内で単語や画像を刺激として研究されてきた（詳しくは、Erdelyi, 1996; Payne, 1987; Roediger & Challis, 1989; Roediger, McDermott, & Goff, 1997を参照）。これらの研究結果から明らかになったことは、再生テストを繰り返したり時間をかけることによって、確かに、再生量が増大するということである。ただし、これらの研究は、研究者の関心が正再生数の増大にあること、刺激として単語や画像が使われていること、の2つの理由から、再生の反復による悪影響（つまり、記憶エラーや偽りの記憶の出現）については、ほとんど何も明らかにされてこなかった。

これに対して、先に述べた Hyman たちの研究 (Hyman et al., 1995; Hyman & Pentland, 1996) においては、面接（再生テスト）の繰り返しによって、幼児期の出来事の正しい記憶が増加するだけでなく、偽りの記憶も増大することが明らかにされている（図1を参照）。同様に、リスト単語を用いた実験室内の研究においても、再生テストの繰り返しによって偽りの記憶

が増大することが認められている (McDermott, 1996 a, b)。

さらにまた、記憶テストに時間をかけることによって同様の結果が得られている。たとえば、Williams & Hollan (1981) は、4名の被験者を対象に、高校時代のかつての級友の名前を長い時間をかけて再生させた。その結果、被験者別に図2、図3に示したように、時間をかけるにつれて、実在の級友の名前の再生数が増加したが、同時に、級友でない名前の誤った再生数も増えることが明らかになった（とりわけ、図3の被験者の場合、最終的には誤った再生数の方が多くなっている）。このようなエラーは、高校時代以前やそれ以降の知り合いの名前との混同、すなわちソース・モニタリングの混同のために生じたと解釈することができる (Johnson et al., 1993)。

これらのことから、心理療法において、長い時間をかけて記憶を回復させようという作業の繰り返しは、偽りの記憶を作り出してしまう危険性を高くしてしまうと結論できよう (Roediger et al., 1997)。

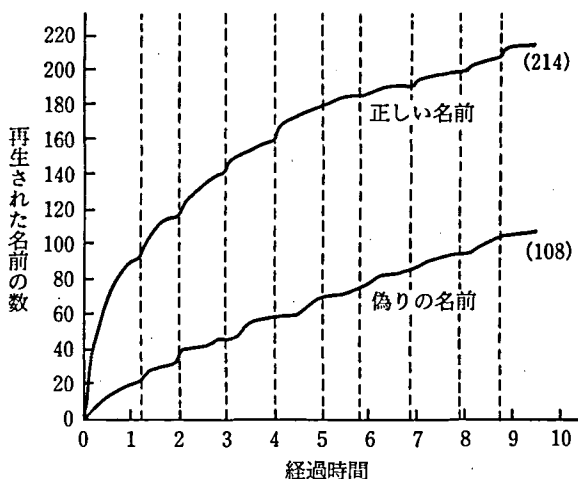


図2 ある被験者における正しい名前と偽りの名前の累積再生数 (Williams & Hollan, 1981)

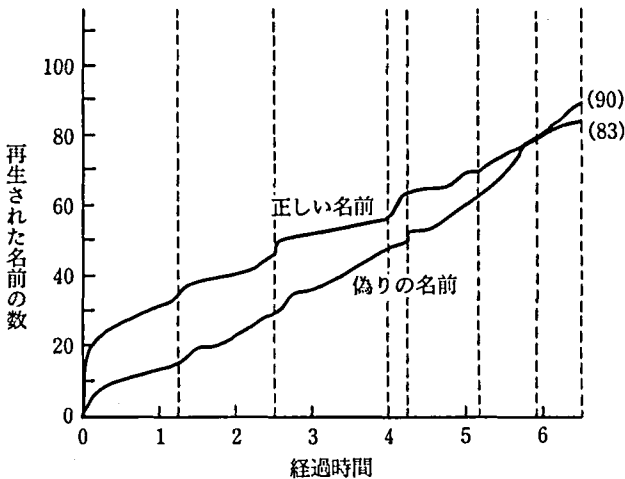


図3 別の被験者における正しい名前と偽りの名前の累積再生数
(Williams & Hollan, 1981)

5. 情動的出来事の記憶の忘却

(1) ストレス後心的外傷障害 (PTSD) における想起不能

性的虐待のような出来事は、きわめてストレスの高いトラウマ体験と言ってよいと思われる。そこで、ここでは、最近、話題になることの多いストレス後心的外傷障害 (post-traumatic stress disorder: PTSD) との関連から、これらの情動的出来事の記憶の忘却について考えることにする。

PTSD とは、何らかの外傷的事件がきっかけとなり、さまざまな心的障害が複合的に生じるものである (American Psychiatric Association, 1994)。これらの心的障害に見られる記憶障害として、外傷的事件の重要な局面の想起ができなくなることが記されている。確かに、たとえば、レイプを受けた被害者が、あまりにも強烈な感情的ストレス (ショック) のために、事件そのものの記憶を思い出せなくなってしまうということが報告されて

いる（たとえば, Christianson & Nilsson, 1989; なお, Burgess & Holmstrom, 1974も参照）。また, 祖父の死による精神的ショックによって, 自分自身のことをまったく思い出せなくなってしまうという事例も報告されている (Schacter, Wang, Tulving, & Freedman, 1982; なお, Gregg, 1986も参照)。

したがって, きわめて強烈なストレス体験と考えられる児童期の性的虐待を PTSD として位置づけることによって, ここで見てきたような想起不能 (すなわち抑圧) が起こると主張されることが多い。

(2) 児童期の性的虐待の記憶

しかしながら, これらのごく少数の事例をもとに, 児童期の性的虐待の記憶が抑圧されてしまうと結論づけることは, 次の2つの理由から考えて, あまりにも性急すぎよう。すなわち, 第1に, PTSD においては, むしろ外傷的事件の記憶が鮮明なまま, 長期間にわたって, 保持されること (時には反復的なフラッシュバック) の方が多く, 事実, そのような事例が数多く報告されている (Christianson, 1992; McManus, 1995)。

第2に, より重要なこととして, 児童に対する性的虐待は何度も繰り返されることが一般的であるのに対して, PTSD に関する事例は, いずれも, たった一回限りの外傷体験であるという点で異なっている。したがって, これらの一回限りの PTSD の事例が, 何度も繰り返される性的虐待の記憶に対して, そのまま適用できるかどうかは, まったく別の問題である。一般に, 同じような出来事が何度も繰り返された場合, たとえ, 一回一回の出来事の詳細が互いに弁別できなくなったとしても (Kail, 1990), そのような出来事そのものが起こったことの記憶は保持されている方が普通である。

以上述べた2つの理由で, 性的虐待の記憶が完全に忘却 (抑圧) されてしまうとは考えにくい。実際, このことは, 間接的ながら, 実証的な裏づけがいくつか存在している。たとえば, Wagenaar & Groeneweg (1990) は, ナチスの強制収容所に収容され虐待を受けていた78名を対象に, 収容所時

代の不快な記憶が保持されているかどうかを調べている。これらの人々からは、強制収容所から解放された直後に、収容所生活の証言（記憶）がすでに得られていた。そこで、解放されてから40年後に、もう一度、面接を行って、解放直後の記憶内容と比較したところ、その記憶の大部分が40年たってもなお鮮明に残っていることが明らかにされている。また、実験室内の研究において、ストレスとなる情動的出来事の周辺の（peripheral）情報の記憶は悪くなるものの、出来事を中心となる中心的（central）情報の記憶は優れることが明らかにされている（Burke, Heuer, & Reisberg, 1992; Christianson & Loftus, 1991; Christianson, Loftus, Hoffman, & Loftus, 1991）。さらにまた、現在論争中ではあるものの、情動的体験がストレスに関連したホルモンの放出を促し、その体験の記憶の定着を促進するという可能性も神経科学の分野から示唆されている（Cahill, Prins, Weber, & McGaugh, 1994）。

もちろん、これらの研究は、児童期の性的虐待の記憶を直接に扱ったものではないが、子どものストレス体験の記憶が悪くないという知見（詳しくは、Ceci & Bruck, 1993; Kail, 1990を参照）と合わせて考えてみた場合、児童期の性的虐待の記憶がまったく忘却されてしまうというようなことは、きわめてまれにしか起こり得ないと結論づけてよいと思われる（Lindsay & Read, 1994）。

6. おわりに——偽りの記憶研究の今後の課題

ここで取り上げた3つのトピックスは、偽りの記憶研究で検討されている問題のごく一部分にすぎない。これ以外にも、たとえば、偽りの記憶の個人差（Hyman & Billings, 1995; Spanos, Cross, Dickson, & Dubreuil, 1993）、偽りの記憶を信じてしまう仕組み（Roediger et al., 1997）、偽りの記憶を防ぐ方法や現実の記憶との識別法（Lindsay & Read, 1994）、性的虐待と現在の症状との関連性（詳しくは、Kihlstrom, 1997; Lindsay & Read, 1994; Schac-

ter et al., 1997を参照), 性的虐待が脳に及ぼす神経科学的な影響 (Stein, Koverala, Hanna, Torchia, & McClarty, 1995; Schacter et al., 1997) などの研究が活発に進められている。しかし、今後さらに検討しなければならない問題は、まだ山積みの状態である。

ここでは、これまでの偽りの記憶研究において検討されてこなかった問題を3つだけ指摘することにする。すなわち、第1に、偽りの記憶研究においては、リハーサル (rehearsal) や精緻化 (elaboration) などの、いわゆる符号化方略 (encoding strategies) の要因について、まったく検討されていない。ある出来事ないしは情報の記憶の保持の程度は、それを符号化する際に行われた符号化方略によって大きな影響を受ける (詳しくは、高橋, 1997 a を参照)。そのような意味で、今後、性的虐待のような、きわめて情動的ストレスの強い場合に、どのような符号化方略が行われ、それが記憶にどのような影響を与えるのかについての検討が必要であろう (なお、高橋, 1997 b も参照)。

第2に、これまで注目されてこなかった要因として、心理療法場面におけるクライアントと心理療法家との協同想起 (collaborative remembering) の影響についての検討があげられる。すなわち、多くの場合、偽りの記憶は、クライアントが心理療法を通して、心理療法家と協同して生み出されている (あるいはまた、犠牲者同士の自助グループの中で生み出されることもある)。近年、個人で想起する事態だけではなく、2人以上で協同して想起を行うという協同想起の特殊性が次第に注目を浴びている (詳しくは、森, 1995; 高橋, 印刷中を参照)。たとえば、「三人寄れば文殊の知恵」といった常識からの予想とは異なり、個人では想起できない情報が協同想起によって新たに想起されることはない (齊藤・高橋, 1995; 高橋, 1996; 高橋・齊藤, 1995)。また、誤って想起された記憶についての確信度は、個人の場合よりも協同想起の場合の方が高い (Stephenson, Clark, & Wade, 1986)。これらの事実は、心理療法において、「抑圧された記憶」が回復されないばかりか、協同想起のために、偽りの記憶に対する自信をかえって深めてしまうとい

う危険性を示唆している。したがって、心理療法による記憶の回復の問題点を考えていく際には、これらの知見を踏まえた上で、協同想起という面からも検討していくべきであろう。

第3に、不幸にして作り出されてしまった偽りの記憶を消し去る方法についての検討が必要であろう。おそらく、このことを考える際に有用なのが、対人関係における記憶のダイナミズムという視点であろう。結局のところ、性的虐待とは対人関係の極端な形を反映した出来事である。我々の日常生活の大部分が何らかの形で人と関わっていることを考えるのならば、我々の記憶というものが、対人関係の中で影響を受けながら作り上げられ、そして、その後の対人関係の中で再解釈され変化し続けると言えるかもしれない。たとえば、妙木（1994）は、「想起としての『心の傷』は、『今ここで』という視点や後から見た視点を通じてこそ、外傷的であることも多く、心的外傷を形成しているのが現在の関係にあるということもあり得る。」（p. 198）と述べている。偽りの記憶を作り上げた者たちの多くが現在の対人関係に問題をもっている事実（Gudjonsson, 1997）を考え合わせると、対人関係の改善によって偽りの記憶を消し去ることができるかもしれない。

いずれにしろ、偽りの記憶をめぐる研究はまだじまっただけであって、これまで述べてきたことからわかるように、真の意味で、学際的な研究が切に必要とされている分野であることだけは確かである。

引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV*. Washington D. C.: American Psychiatric Association.
 (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 訳 1995 DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)
- Andrews, B. 1997 Can a survey of British False Memory Society members reliably inform the recovered memory debate? *Applied Cognitive Psychology*, 11, 19-23.
- Appelbaum, P. S., Uyehara, L., & Elin, M. (Eds.) in press *Trauma and memory: Clinical and legal controversies*. Oxford: Oxford University Press.

- Barbara, K., & Lohstöter, I. 1984 *Väter als Täter*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (バルバラ・カーフェマン/イングリット・ローシュテーター著 中野京子/五十嵐落子 1992 強姦する父—娘への性的虐待 未来社)
- Bartlett, F. C. 1932 *Remembering: A study in experimental and social psychology*. London: Cambridge University Press. (F.C. バートレット 著 宇津木保・辻正三 訳 1983 想起の心理学 誠信書房)
- Bass, E., & Thornton, L. (Eds.) 1983 *I never told anyone: Writing by women survivors of child sexual abuse*. New York: Harper & Row. (エレン・バズルウィーズ/ルイーズ・ソーントン共編 森田ゆり訳 1991 誰にも言えなかった—子ども時代に性暴力を受けた女性たちの体験記 築地書館)
- Bowers, K. S., & Farvolden, P. 1996 Revisiting a century-old Freudian slip—From suggestion disavowed to the truth repressed. *Psychological Bulletin*, 119, 355-380.
- Burgess, A. W., & Holmstrom, L. L. 1974 Rape trauma syndrome. *American Journal of Psychiatry*, 131, 981-986.
- Burke, A., Heuer, F., & Reisberg, D. 1992 Remembering emotional events. *Memory and Cognition*, 20, 277-290.
- Cahill, L., Prins, B., Weber, M., & McGaugh, J. L. 1994 β -Adrenergic activation and memory for emotional events. *Nature*, 371, 702-704.
- Ceci, S. J., & Bruck, M. 1993 Suggestibility of the child witness: A historical review and synthesis. *Psychological Bulletin*, 113, 403-439.
- Ceci, S. J., Crotteau, M. L., Smith, E., & Loftus, E. F. 1994 Repeatedly thinking about a non-event: Source misattributions among preschoolers. *Consciousness and Cognition*, 3, 388-407.
- Christianson, S-A. 1992 Remembering emotional events: Potential mechanisms. In S-A. Christianson (Ed.), *The handbook of emotion and memory: Research and theory*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 307-340.
- Christianson, S-A, Loftus, E. F. 1991 Remembering emotional events: The fate of detailed information. *Cognition and Emotion*, 5, 81-108.
- Christianson, S-A, Loftus, E. F., Hoffman, H., & Loftus, G. R. 1991 Eye fixations and memory for emotional events. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 17, 693-701.
- Christianson, S.-A., & Nilsson, L.-G. 1989 Hysterical amnesia: A case of aversively motivated isolation of memory. In T. Archer & L.-G. Nilsson (Eds.), *Aversion, avoidance, and anxiety: Perspectives on aversively motivated behavior*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 289-310.
- Conway, M. 1990 *Autobiographical memory: An introduction*. Milton Keynes: Open University Press.
- Conway, M. A. (Ed.) 1997 *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford University Press.

- Ebbinghaus, H. 1885 *Über das Gedächtnis: Untersuchungen zur experimentelle Psychologie*. Leipzig: Duncker & Humblot. (ヘルマン・エビングハウス 著 宇津木保 訳 望月衛 関 1978 記憶について [Ruger, H. A., & Busse-nius, C. E. の英訳 Dover Publication, 1964による] 誠信書房)
- Erdelyi, M. H. 1996 *The recovery of unconscious memories: Hypermnnesia and re-miniscence*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Freud, S. 1915 *Verdrängung*. In Sigmund Freud GESAMMELTE WERKE Bd, XIV. Frankfurt am Mein: S. Fischer Verlag GmbH. (井村恒郎・小此木啓吾 他訳 1970 フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 人文書院 Pp. 78-86.)
- Gregg, V. H. 1986 *An introduction to human memory*. London: Routledge & Kegan Paul Limited. (V.H. グレグ 著 梅本堯夫 監修 高橋雅延・川口敦生・菅真佐子 訳 1988 ヒューマンメモリ サイエンス社)
- Gudjonsson, G. H. 1992 *The psychology of interrogations, confessions and testi-mony*. Chichester: John Wiley. (ギスリー・グッドジョンソン著 庭山英雄・渡部保夫・浜田寿美夫・村岡啓一・高野隆訳 1994 取調べ・自白・証言の心理学 酒井書店)
- Gudjonsson, G. H. 1997 Accusations by adults of childhood sexual abuse: A sur-vey of the members of the British False Memory Society (BFMS). *Applied Cognitive Psychology*, 11, 3-18.
- Halperin, D. A. (Ed.) in press *False memory syndrome: Therapeutic and forensic perspectives*. American Psychiatric Press.
- 保積純 1994 甦る魂—性暴力の後遺症を生きぬいて— 高文研
- Hyman, I. E. Jr., & Billings, F. J. 1995 Individual differences and the creation of false childhood memories. Submitted for publication.
- Hyman, I. E. Jr., Husband, T. H., & Billings, F. J. 1995 False memories of child-hood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181-197.
- Hyman, I. E. Jr., & Pentland, J. 1996 The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language*, 35, 101-117.
- 池田由子 1987 児童虐待—ゆがんだ親子関係 中央公論社
- 池田由子 1991 汝わが子を犯すなかれ—日本の近親姦と性的虐待— 弘文堂
- 石川義之 1995 性的被害の実態—大学生・専門学校生調査の分析と考察— 鳥根大学法文学部社会学研究室
- 敵島行雄 1996 誤情報効果の展望: Loftus paradigm 以降の発展 認知科学, 3, 5-18.
- Johnson, M. K., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- Johnson, M. K., & Raye, C. L. 1981 Reality monitoring. *Psychological Review*, 88, 67-85.
- Kail, R. 1990 *The development of memory in children*. 3rd. ed. New York: Free-man. (R. ケイル著 高橋雅延・清水寛之 訳 1993 子どもの記憶—おぼえること・わすれること—サイエンス社)

河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店

Kihlstrom, J. F. 1997 Suffering from reminiscences: Exhumed memory, implicit memory, and the return of the repressed. In M. A. Conway (Ed.) *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford University Press. Pp. 100-117.

Lindsay, D. S. 1994 Contextualizing and clarifying criticisms of memory work in psychotherapy. *Consciousness and Cognition*, 3, 426-437.

Lindsay, D. S., & Read, J. D. 1994 Psychotherapy and memories of childhood sexual abuse: A cognitive perspective. *Applied Cognitive Psychology*, 8, 281-338.

Loftus, E. F. 1979 *Eyewitness testimony*. Cambridge: Harvard University Press. (E. F. ロフトス 著 西本武彦 訳 1987 目撃者の証言 誠信書房)

Loftus, E. F. 1993 The reality of repressed memories. *American Psychologist*, 48, 518-537.

Loftus, E. F., Feldman, J., & Dashiell, R. 1995 The reality of illusory memories. In D. L. Schacter (Ed.), *Memory Distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press. Pp. 47-68.

Loftus, E. F., & Loftus, G. R. 1980 On the permanence of stored information in the human brain. *American Psychologist*, 35, 409-420.

Loftus, E. F., & Miller, D. G., & Burns, H. J. 1978 Semantic integration of verbal information into a visual memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 4, 19-31.

Loftus, E. F., & Palmer, J. 1974 Reconstruction of automobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 585-589.

Lynn, S. J., & Nash, M. R. 1994 Truth in memory: Remifications for psychotherapy and hypnotherapy. *American Journal of Hypnosis*, 36, 194-208.

McDermott, K. B. 1996a The persistence of false memories in list recall. *Journal of Memory and Language*, 35, 212-230.

McDermott, K. B. 1996b Guessing and testing magnify memory illusions. Manuscript in preparation.

McManus, M. L. 1995 *Quake stress*. Portland, Oregon: Castle International. (マリアンヌ L. マクマナス 著 林春男・林由美 訳 1995 災害ストレス—心をやわらげるヒント—法研)

McNaron, T. A. H., & Morgan, Y. 1982 *Voices in the night: Women speaking about incest*. San Francisco: Cleis Press. (トニー・A・H・マクナロン／ヤーロウ・モーガン 編著 長谷川真実 訳 1995 記憶の底から—家庭内性暴力を語る女性たち—青弓社)

森直久 1995 共同想起事態における想起の機能と集団の性格 心理学評論, 107-136.

森田ゆり 編著 1992 沈黙をやぶって 子ども時代に性暴力を受けた女性たちの証言+心を癒す教本 築地書館

- 妙木浩之 1994 「累積の外傷」という考え方 イマーゴ 7月号 (Vol. 5-8) 青土社 Pp.195-209.
- Moscovitch, M. 1995 Confabulation. In D. L. Schacter (Ed.), *Memory Distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press. Pp. 226-251.
- Payne, D. G. 1987 Hypermnesia and reminiscence in recall: A historical and empirical review. *Psychological Bulletin*, 101, 5-27.
- Pezdek, K., & Banks, W. P. (Eds.) 1996 *The recovered memory/false memory debate*. San Diego: Academic Press.
- Poole, D. A., Lindsay, D. S., Memon, A., & Bull, R. 1995 Psychotherapy and the recovery of memories of childhood sexual abuse: U. S. and British practitioners' opinions, practices, and experiences. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 63, 426-437.
- Roediger, H. L. III 1996 Memory illusions. *Journal of Memory and Language*, 35, 76-100.
- Roediger, H. L. III & Challis, B. H. 1989 Hypermnesia: Improvements in recall with repeated testing. In C. Izawa (Ed.), *Current issues in cognitive processes: The Tulane Flowerree Symposium on cognition*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 175-199.
- Roediger, H. L. III, McDermott, K. B., & Goff, L. M. 1997 Recovery of true and false memories: Paradoxical effects of repeated testing. In M. A. Conway (Ed.) *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford University Press. Pp. 118-149.
- Ross, D. F., Read, J. D., & Toglia, M. P. (Eds.) 1994 *Adult eyewitness testimony: Current trends and developments*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rubin, D. C. (Ed.) 1996 *Remembering our past: Studies in autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 斎藤学 1992 子供の愛し方がわからない親たち—児童虐待, 何が起きているか, どうすべきか 講談社
- 齊藤智・高橋雅延 1995 When two heads are better than one. 関西心理学会第107回大会発表論文集, 7.
- Sandler, J. in press *Recovered memories of abuse: True or false?* London: Karnac Books.
- Schacter, D. L. 1995 Memory distortion: History and current status. In D. L. Schacter (Ed.), *Memory Distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press. Pp. 1-43.
- Schacter, D. L., Norman, K. A., & Koutstaal, W. 1997 The recovered memories debate: A cognitive neuroscience perspective. In M. A. Conway (Ed.) *Recovered memories and false memories*. Oxford: Oxford University Press. Pp. 63-99.
- Schacter, D. L., Wang, P. L., Tulving, E., & Freedman, M. 1982 Functional re-

- trograde amnesia: A quantitative case study. *Neuropsychologia*, 20, 523-532.
- Spanos, N. P., Cross, P. A., Dickson, K., & Dubreuil, S. C. 1993 Close encounters: An examination of UFO experiences. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 624-632.
- Spiegel, D. 1995 Hypnosis and suggestion. In D. L. Schacter (Ed.), *Memory Distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. Cambridge: Harvard University Press. Pp. 129-149.
- Squire, L. R. 1987 *Memory and brain*. New York: Oxford University Press. (L.R. Squire 著 河内十郎訳 1989 記憶と脳—心理学と神経科学の統合医学書院)
- Squire, L. R. 1992 Memory and the hippocampus: A synthesis from findings with rats, monkeys, and humans. *Psychological Review*, 99, 195-231.
- Stein, M. B., Koverala, C., Hanna, C., Torchia, M. G., & McClarty, B. 1995 Neurobiological correlates of childhood sexual abuse: II. MRI-based measurement of hippocampal volume in adult women. (Submitted)
- Stephenson, G. M., Clark, N. K., & Wade, G. S. 1986 Meetings make evidence? An experimental study of collaborative and individual recall of a simulated police interrogation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1113-1122.
- 高橋雅延 1996 When are two heads better than one? 関西心理学会第108回大会発表論文集, 13.
- 高橋雅延 1997a 記憶における符号化方略の研究 北大路書房
- 高橋雅延 1997b 悲しみの認知心理学—気分と記憶の関係 松井豊編 悲嘆の心理 サイエンス社 Pp. 52-82.
- 高橋雅延 印刷中 記憶の社会的側面—協同想起をめぐって— 梅本堯夫監修 認知研究の最先端 (仮題) 培風館
- 高橋雅延・齊藤智 1995 When two heads are *not* better than one. 関西心理学会第107回大会発表論文集, 8.
- Thompson, C. P., Skowronski, J. J., Larsen, S. F., & Bets, A. L. 1996 *Autobiographical Memory: Remembering what and remembering when*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Tulving, E. 1983 *Elements of episodic memory*. Oxford: Oxford University Press. (エンデル・タルヴィング 著 太田信夫 訳 1985 タルヴィングの記憶理論—エピソード記憶の要素— 教育出版)
- 山口遼子 1994 セクシャルアビューズ サンドケイ出版局
- Wagenaar, W. A., & Groeneweg, J. 1990 The memory of concentration camp survivors. *Applied Cognitive Psychology*, 4, 77-87.
- Williams, M. D., & Hollan, J. D. 1981 The process of retrieval from very long-term memory. *Cognitive Science*, 5, 87-119.
- 全国児童相談所長会 1989 子どもの人権侵害例の調査及び子どもの人権擁護のための児童相談所の役割についての意見調査の報告 全国児童相談所長会議事録